

東日本大震災と若年労働者の脆弱性

——仙台市における若年層調査データの分析——

東北学院大学 神林博史

1 目的

脆弱性 *vulnerability* は、災害の社会学的研究における重要概念の1つである。これは簡単に言えば、災害における「被害のあいやすさ」のことである。脆弱性は地域特性や社会階層と密接な関係があり、一般に、社会階層が低い人びとほど脆弱性が高い傾向がある (Wisner et al 2004)。

日本の場合、阪神・淡路大震災をきっかけとして社会階層と脆弱性の関係が注目されるようになった。この地震による死者の8割は、家屋の倒壊による圧死であった。倒壊の危険性が高い古い木造建築に居住していたのは主に低階層の人びとであり、結果として死亡率に社会階層による格差が生じたのである。

東日本大震災の死者は約1万5千名にのぼるが、その死因の9割は津波による水死であった。津波被害は当然のことながら沿岸部に集中しており、避難に困難を抱えやすい高齢者の死亡率が高かった。その意味で、東日本大震災による死亡リスクは居住地域と年齢に強く規定されていた。では、東日本大震災においては社会階層と脆弱性の関連は存在しなかったのかと言えば、そうではない。震災のダメージは住居、雇用、収入など様々な面で人びとの生活に長期的な影響を及ぼす。こうした面での脆弱性はしばしば見えにくいだが、決して見落としてはならないものである。

本報告では、2012年に仙台市で実施された若年層の調査データをもとに、どのような人が震災の被害にあいやすかったのか、さらにそうした被害経験が震災から1年後の雇用や生活にどのような影響を与えたのかを検討する。

2 方法

「仕事と健康に関する仙台市民調査」データを分析する。この調査は仙台市在住の若年層(25歳から39歳)を対象とする無作為抽出法による郵送調査で、2012年11月から2013年1月にかけて行われた。有効標本数は1405、有効回収率は28.1%である。この調査では「震災による自宅の被害程度」と「震災が原因で経験したこと」(12項目)の2種類の質問で震災被害を尋ねている。今回はこれらの項目について、(1) どのような人が被害を経験しやすかったのか、(2) 震災被害が震災後の雇用や生活にどのような影響を与えているのか、の2点について有職者に限定し男女別に分析した。

3 結果

暫定的な分析結果は以下の通りである。(1) 被害経験を従属変数、年齢、学歴、居住地域を独立変数としたロジスティック回帰分析を行った。学歴が低いと「失職・転職」「収入の低下」のような経済的被害を経験しやすく、この傾向は女性の方が強い。(2) 被害経験を独立変数、「非正規雇用か否か」および「貧困状態にあるか否か」を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った。経済的被害などいくつかの被害経験は、他の変数をコントロールしても従属変数に対し有意な正の効果を持つ。また、被害経験の効果は女性の場合により明確にあらわれた。

4 結論

若年労働者においても脆弱性と社会階層の関連が存在し、学歴とジェンダーが交互作用する形で震災被害およびその後の生活に影響することが明らかになった。このことは、現代日本において若年層女性が抱えやすい種々の社会経済的問題が、震災の影響によって増幅されたことを示唆している。

文献：Wisner, Ben, et al, 2004, *At Risk: Natural Hazards, People's Vulnerability and Disasters* (2nd Edition), New York: Routledge.